

実践報告 (Report)

# 子どもの主体性・協同性を育てる保育の実践

——子どもたちとつくる百科事典——

**A practice of encouraging children's independence and cooperativeness: Edit of an encyclopedia with children**

齋藤 善郎\*  
SAITO, Yoshiro\*

## 摘 要

幼児期は、自分の生活を離れて知識や技能を一方的に教えられて身につけていく時期ではなく、生活の中で自分の興味や関心に基づいた直接的な経験を通して、周囲の事象に気づき自分の世界を広げていく時期である。幼児教育では、こうした幼児の特徴をふまえておこなわれることが望まれる。活動の主体は幼児であり、教師は活動が生まれやすく、展開しやすいように意図をもって環境を構成するために、様々な「きっかけづくり」や「しかけづくり」をしていくことが求められる。本稿では、五歳児が保育者とともに自分たちで百科事典をつくらうという計画を立て、それを年間を通してつくっていく過程を記録した。百科事典をつくるにあたり、様々なものに自ら関わりたいという幼児の姿を保障し、その関わりを通して、対象となるものの潜在的な学びの価値を引き出すことができるように、保育者がどのように配慮して保育を展開していくかを中心にまとめた。幼児の環境との主体的なかかわりを大切にし、幼児の視点からすると、自由感にあふれる保育となるためにはどのような工夫が必要かを念頭においた実践の経過を記録した。

**キーワード**：幼児の主体性、絵本から広がる世界、協同的な学び、年間計画

**Key words**：children's independence, expanded by picture books, learning cooperatively, annual plan

## 1. 研究の背景と目的

幼児期の教育に求められるものは、決して教師主導でシステムの・画一的になされるものではなく、興味や関心に基づいた直接的な体験の中から得られるものを大切にすることだと考えられる。すなわち、幼児なりの思いや願い、自らかかわろうとする意欲を大事にする保育の展開である。そこでは、じっくり取り組むことができる時間・空間・遊具を確保し、仲間と興味や関心を共有できる活動を用意する必要がある。これらのことは長く幼児教育に必要なことといわれ続けてきたが、なかなか保育

実践に反映されずにきている。

平成30年に「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育保育要領」が改訂をされる。この中には、上記のことをさらに精選し推進されるように、次のようにまとめられ、示されている。すなわち、幼児期に育みたい資質・能力として、①豊かな体験を通じて、感じたり、気付いたり、分かたり、できるようになったりすること。②気付いたことや、できるようになったことなどを使い、考えたり、試したり、工夫したり、表現したりすること。③心情・意欲・態度が育つ中で、よりよい生活を営もうとすること、が挙げられている。

保育の実践の中で、これらの視点をどのように取り入れていくことができるか、検討する必要がある。豊かな体験の背景には、身近な環境に主体的にかかわり、様々な活動を楽しむ幼児の姿が求められる。幼児はこうした環境の中で、身近な事象に積極的にかかわり、物の性質や仕組みなどを感じ取ったり、気付いたりして、自ら考え、予測し、工夫することを楽しむようになる。これらの活動は、仲間との生活の中、互いの思いを伝え合い共有することで、充実感が深まる。

具体的な保育実践の中で、どのような取り組みがこれらの事柄を満たすであろうか。本編では、人間関係が深まり学び合いが可能となる五歳児の姿をとらえ、実践されている保育について報告をする。

## 2. 研究の方法

前年度において、園児の観察を実施した豊橋才能教育こども園で引き続き保育の様子を観察した。平成29年度に向けての教育課程を編成する春休み中の教職員の取り組みをみることから始め、どのように子どもたちが主体的にかかわることのできる環境を用意するかを検討していく過程から参画した。また、昨年は三歳児での絵本から発展した遊びとしての「電車ごっこ」に焦点をあてたが、今年度は五歳児の活動を年間を通して継続的に見ていくことで、子どもたちの活動への意欲をひきだすように配慮している保育展開の様子を見たいと考えた。

豊橋才能教育こども園五歳児（4クラス98人）を対象とし、4月から8月までの保育活動の実践の様子を観察した。

## 3. 保育実践の振り返りと教育課程の編成

一年間の保育実践の振り返りを全教職員（常勤教職員32人）で3月下旬に実施し、新たな教育課程を編成する時の参考にしている。こうした教育課程の「計画－実践－振り返り－再構成」の取り組みは、「カリキュラム・マネジメント」として、近年、文部科学省から実施が強く求められるようになってきており、本こども園では、平成26年から教育課程の再構築として実施している。

本年3月の「保育の振り返り」の話し合いの中から、以下のような意見が集約された。園児が絵本に日常的に触れることが多くなり、発想の広がりがみられたことにより、自分たちでイメージした遊びを展開することが多くなった。遊びは1～2ヶ月と長期にわたり広げられていき、イメージを共有しながら、クラスの壁や学年の壁を越えて広がっていった。こうした活動は、絵本コーナーで過ごす時間とそれに続く自由な活動の時間を使って行われていく様子が見られ、自然発生的に絵本のイメージから発した遊びが広がっていった。

本年度も基本的には同様に遊びが展開されることを期待するが、事前に年間計画の中に落とし込んでいって、教職員全体での意識の共有を図っていきたいという意見が出された。園児が主体的にかかわることを保障しながら、ただ偶発的に生じる活動をとらえるのではなく、発達の筋道を見通しながら、周りにある事物、自然環境、社会事象をとらえながら保育を考えたいという思いから、本年は表1のような年間計画をたて、それに沿って保育を展開していく。ただし、計画はあくまで計画であって、園児の興味・関心、活動の様子などから、常に修正をしていくものであり、その都度教職員同士で再構築された計画を共有することを基本とした。

#### 4. 年間計画の作成

五歳児では、年間を通して「百科事典づくり」をひとつのテーマとしていきたいという考え方が示された。年中児の後半から、子どもたちは「図鑑」に興味をもち、多くの子どもたちがそれを手にとった。このことから、自分たちでテーマの内容について調べ、それを絵や写真にして展示するという活動をしてみようということになった。園児が自分で観察でき、考え、表現できる内容は何か。年間を通してそれぞれの時期にあったテーマを提示し、園児の自ら取り組みたいという意欲を醸し出す活動にもっていきたいという願いをもって次のような内容を、まず園児に示すこととした。

**4月初旬：**「百科事典って何だろう」自分たちで、観察し、つくってみて、それを年中さんや年少さんに解るように伝える本をつくらうという案を提示する。百科事典は、園舎の玄関のところにある大きな掲示板の上に貼ることとしたい。

**4月：**「マリーゴールドってどんな花？」4月から各自一鉢ずつ植えたマリーゴールドの花を観察して、観察したことを百科事典に書き込んでいく。

**5月：**「動物」園外保育で、動物園に行く機会をもち、そこで動物を観察し、動物についての興味を広げ、自分たちなりに動物の生態を考え、どのように動物園で過ごしているか、意見を出し合うことを通して、段ボールなどを利用して、動物園づくりをすすめていく。

**6月：**テーマは「色」。色の不思議さを知ることを目的として、様々な活動に取り組む。色水遊び・フィンガーペイント・混色の楽しさ・光を通しての色など。

**7月：**テーマは「魚・海のボールド」。この時期、水に親しむ機会が増え、水を介した

表1 年間計画  
豊橋才能教育こども園 年間計画 平成29年度  
「なんだろう？笑顔いっぱい夢いっぱい」

	(4月)	(5月)	(6月)	(7月)	(8月)
	「みんな仲良し」			「夏と自然」	
	園内遊び				
午後	戸外遊びをしよう				
満3歳	・園生活に慣れよう	・お外でいっぱい遊ぼう	・自然を見つけよう	・泥あそび、水遊びを楽しむ	
年少	年間を通して体力作りと園外散歩へ行く				
年中	・お兄さんお姉さんに先生になってもらい教えてもらう。	・ピーマンができたらクッキング			
	・園内探検しよう	・動物園に行き、動物を作る (ボールド)	・新しい物を見つげに行こう →	・色水遊び (オシロイバナ、つゆくさをとんでくる)	・シャボン玉
	・友だちや先生と仲よくなるよう	・新しい物を見つげに行こう	・さらに見つけに行こう (田んぼ、農家、お店、市電)	・色水、泡、泡遊び	・泥遊び、水遊び、洗濯遊び、
年長	・小さいお友だちに優しくしよう	・動物 (興味のある動物を自分で調べたり作りたりしよう)・魚、海のボールド(ぎよぎよランドを創ろう)・水 (水遊び、水にたくさん触れよう)	・色 (色の不思議を知ろう。色水を作ったり、他の学年に教えたり)	・みんなであつなげて遊ぼう	・表現遊びをする。
	(9月)	(10月)	(11月)	(12月)	
	「いっぱい感じていっぱい表現しよう」				
	各部屋				
午後	戸外遊び				
満3歳	・野菜を育てよう	・いっぱい体を動かそう	各部屋		
年少	・生活リズムを整えよう	・いっぱい体を動かそう	・交通系のボールド (交通公園に行く)	・なりきって歌おう！踊ろう！	・素敵な姿を見てもらおう
年中	・体を動かそう！！ (ボールを使ったりする)	・クッキングをしよう	・大根を植える→3学期おでんパーティー	・お楽しみ会で、紙テープを使って張りめぐらせて遊ぶ。	・劇あそびをたくさん見る。
	・体を動かそう、踊ろう	・なりきって遊ぼう	・みんなでいっばい話そう	・自分の意見を言おう。	・一つの物を作り上げよう
	・からだ (運動会に向けて走るポーズなど体の秘密を知りたい)	・芸術 (陶芸など経験したい) (観る聴く感動を味わいたい)	・職業 (夢を見つげるために色々な職業にふれたい)	・友だち (思いを共有する活動を)	
	(1月)	(2月)	(3月)		
	「想いよ届け 大好きな君にへありがとう～」				
	戸外遊び・縦割りであそぼう				
午後	戸外遊び・縦割りであそぼう				
満3歳	・お友だちといっばい遊ぼう	・お兄さん、お姉さんと関わろう	・「ありがとう」の気持ちを伝えよう		
年少	・劇あそびをする。	・クラスの劇あそびをボールドにする。	・進級する期待をもとう		
年中	・ごっこ遊び (招待しよう)	・ちゅうりっぷぶを植えよう	・春の訪れを感じよう		
	・力をつけよう				
	・心 (ありがとうの気持ち友だち、在園児、お家の人に伝えたい)	・卒園前に百科事典が完成！			
年長	・光 (ステンドグラスを作りたい、玄関などに飾りたい)				

遊びが保育の中心になってくる。イメージとして、水や魚への興味を広げていきたい。

**9月：**テーマは「からだ」。身体を使って遊ぶ機会が多くなっていく。運動会をひかえ、子どもたちはどうしたら早く走れるか、どうしたら高くとべるかなど、自分の身体への関心も高まっていく。あわせて、身体を形成する筋肉や骨などにも関心が向き、図鑑などで調べることもしばしば目にする。こうした時期をとらえて、からだの仕組みの不思議さに気付くようなテーマをなげかけたい。

**10月：**テーマは「芸術」。子どもたちの感性は豊かなものがある。単に製作をしたり、音を奏でたりというのではなく、自分が感じたものにこだわり、自分なりの表現をすることの楽しさを味わう機会としたい。美術館に行くことやプロの演奏者の演奏を聴く機会をもつことも保育の中に取り入れ、そこから発展をさせるため、時間的にもゆとりをもってじっくり取り組めるように保育計画を考える。できあがりこだわることなく、子どもたちが没頭して取り組む過程を大切にしたい。

**11月：**テーマは「職業」。街にある様々な職業に触れることで、将来、自分がどんな職につきたいかを考える機会としたい。仕事をする大人の営みを見聞きすることで、働くことの大切さや大変さにも触れ、自分はこんな仕事をしたいという見通しや憧れの気持ちを醸成する基盤になればという願いをもってこの活動をすすめたい。

**12月：**テーマは「友だち」。協同性を育む活動を大事にしたい。時間的にしぼられることなく、ゆったりした計画の中で、子どもたちが互いに意見を出し合い、イメージを共有することを通して展開していく活動から、仲間と過ごすことの意義や楽しさに気付く機会にしたい。

**1月：**テーマは「光」。徐々に陽射しが強くなり、光の暖かさや強さに気づくこの時期、遊びの中で光に関心をもつ機会をつくりたい。

**2月：**テーマは「心」。抽象的な内容であるが、年長児には相手の気持ちを感じたり、思いを共有する体験を経験していることから、心について一緒に考える時間を持ちたい。

以上の事柄を今年度の計画に入れて保育をすすめることを教職員で確認した。

## 5. 保育の実践

### (1) 「百科事典って何だろう」

年間を通して、できるだけ幅広い内容を取りあげ、それにより子どもたちの興味が広がり具体的な活動の中で、気付く体験・考える体験・意見を出し合う体験・協力して取り組む体験を深めることができることを目的にした。さらに、こうした体験を集約する際に、子どもたちにもこの活動の目的が理解しやすくするために、図書コーナーで手にとっている図鑑や絵本を見た経験からの発展として、百科事典をつくろうという取り組みにした。年間を通しての活動をはじめるにあたり、日々の生活の中での体験をもとに、1～2ヶ月ごとに、互いに考えをまとめ、それを掲示する活動をみんなでするということが、子どもたちに共通に理解されることから始めていった。



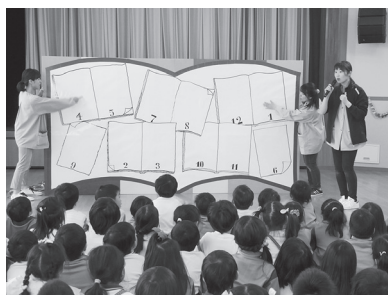


写真1. 百科事典って何だろう

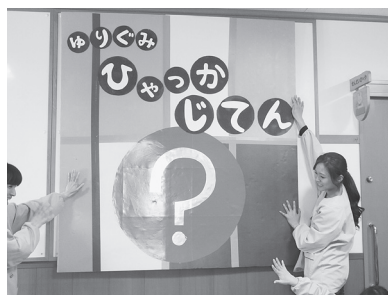


写真2. 百科事典を創ろう



写真3. 図書コーナーにボードを貼る



写真4. 図書コーナー

まず、4月の初めに年長児全員をあつめ、百科事典とはどんなものかを話し合った(写真1, 2)。それをもとにして、一つのテーマについて、みんなで考え、そのテーマについて幼稚園の生活の中で体験したり気付いたりしたことをまとめ、絵にしたり言葉にして、それを年中さん・年少さんたちに知らせていくために、大きなボードをつくり、そこに掲示していこうということにした。ボードは園の図書コーナーの壁に大きく貼り付け、テーマごとにまとめていくこととした(写真3, 4)。

## (2) 「マリーゴールドってどんな花？」

一人一鉢ずつ、マリーゴールドの種を蒔き、それぞれに毎日観察をし、絵を描いたり、図書コーナーの図鑑を見るなどして、3週間ほど育てた(写真5, 6)。その過程で、子どもたちは自分の育てているマリーゴールドを絵に描き、それを図書コーナーのところに貼ることとした(写真7)。



写真5. 種を蒔く



写真6. 花が咲いたよ



写真7. 絵を描こう

### (3) 「動物」

園外保育で豊橋動植物公園に行き、いろいろな動物を見てきた。行く前から、図鑑を見たり、いくつかの絵本に出てくる動物に興味をもち、どの動物を見たいかによってグループに分かれ、その動物のどんなところを見ようという目的をもって出かけることとした。各グループごとに、動物を観察し、それぞれの檻の前に書かれている説明書きを書きとったり、動物の様子を絵にしたり、箇条書きにして持ち帰ったりした。

「ぼくたちのグループはトラを見てきたよ。」「トラって猫の大きいやつみたい」「でも、声は大きくて怖かった。ガオ〜ってないていたよ」等、園に帰って来たら、それぞれのグループで話し合っている。爪がでかかった、目が大きくて怖い、足が大きい、体は黄色で縦に縞が入っていた等の特徴を確認しあいながら、まず、模造紙に大きなトラの絵を描き始めた。

描いているとわからないところもいくつか出てきたようで、「先生、もう一回動物園に行きたい」という声が出てきた。他のグループの子たちも同様なようで、「もう一回、動物園に行きたい」の大合唱となってしまった。先生は「他のクラスの先生とも相談するから、明日まで待つて」ということで、話を収めた。

目的をもって動物を見たいという子どもたちの気持ちを考え、5日後の火曜日にもう一度動物園に行くこととした。

翌日、「先生たちで相談して、来週にもう一回動物園に行くことにしました。でも、ただ行くだけじゃだめだからね。どの動物のどこがみたいのか、グループごとに考えて行くようにしようね」という先生からの話があった。子どもたちは、早速、それぞれのグループで、今自分たちが創っている動物のどこを見てくるか話し合いはじめた。

二度目の動物園から戻ってきた子どもたちは、それから数日をかけて、段ボールなどを使って動物を創りはじめた（写真8）。できあがった動物は保育室の廊下に、それぞれ「肉食動物」「草食動物」「水辺に住む動物」など、それぞれの動物の特徴も書き加えて、置くこととした（写真9）。みんなで見に行き、観察し、記録し、作成した動物についてまとめたものを図書コーナーの壁に貼ってある「百科事典」に書き加えていった（写真10）。



写真8. 製作中のトラ



写真9. 廊下に並べた動物



写真10. 百科事典に書く

#### (4) 「色」

6月になり、戸外での子どもたちの活動の中に、水を取り入れることが多くなってきた。今回のテーマの「色」については、色水あそび以外、なかなかイメージがふくむことがなかった。子どもたちとの話し合いの中でも、ほぼ「色水あそび」の話題が多い。教師の側の環境の提示では、フィンガーペインティング、絵本「クレヨンの黒くん」からの発想で、描いた絵の上を黒く塗りつぶし、それを釘などで引っ掻くことで下の絵を浮かび上がらせる方法や、セロファン紙を使った色の合成などを考えた。しかし、いずれの活動も保育室での造形活動に近く、あまり子どもたちの共感が得られなかった。そこで、今回は、まず色水あそびから入って、どのように子どもたちの活動の発展がみられるかを考えながらすすめることとした（写真11、12）。



写真11. 色水あそび



写真12. 百科事典に載せたもの

結果、遊びの展開から、「色」に関する他の活動に発展させることはできなかった。テーマの抽象性に対して、教師の側がどのように切り込むかが不十分であった点が反省点としてあげられる。抽象的なテーマをいかに具現化した内容として子どもたちに伝えていけるかを、さらに検討する必要があるだろう。二学期以降にも抽象的なテーマがあるが、今回の事例をどのように生かしていくかを考える必要がある。

#### (5) 「魚・海のボード」

今回のテーマは「魚・海のボード」である。去年は「ぼうけんマップ」のテーマで蒲郡の海に行き、そこから港や船に興味を示し、全体で港づくりや船づくりに発展させた。そこで今回は、どのように展開するかを検討した。最近、子どもたちは絵本コーナーで幾冊かの本を読むうちに、海に関連する絵本を手にとることが増えている。このことは、子どもたちにも、今月は「魚・海のボード」というテーマがあることが分かっていることを窺がわせる。

次のページの表（表2）のように、活動は展開していく。これはあるクラスでの活動の様子を図式化したものである。「うみの100階だてのいえ」という絵本から、子どもたちの発想がさまざまに広がっていく様子を示した。この絵本は特徴的で、縦長のもので、蛇腹折りになっており、1階から100階までが、縦に長く描かれている。ネックレスなどを見つけてくることも描かれている。様々な魚の類に興味をもち幾人



表2 「魚・海のボード」のテーマに沿った活動の経過

## うみの100かいだてのいえ

みなさんは、「うみの 100 かいだてのいえ」という絵本はご存知ですか。女の子が船の上でテンちゃんという人形を持っていたのですが海に落としてしまいました。海に沈む間に身につけていた帽子やネックレス、髪の毛ですべてのものが海の中に散らばってしまいました。そして、テンちゃんは不思議な泡の中に吸い込まれて行ったのです。そこは海の 100 階だての家だったのです。テンちゃんの服などは 100 階だての家のあちこちについてしまい探していくというお話です。

## うみに大変身！

ある日、こども園に来てみると 1 階の廊下が海に変身していました。子どもたちは「わあ～すごい」「海だ～！」と海の中散歩したり泳いだりする姿が見られました。

## テンちゃんがでてきたよ

そして、先生たちが「うみの 100 かいだてのいえ」のペープサートを作り話をしてくれました。服などがなくなってしまったテンちゃんを見て「大変！」「服を探さないと」と困っているテンちゃんを助けてあげるようになりました。

どのように服やネックレスを探そうか・・・みんな一生懸命考え、そして、海に住んでいる生き物なら見つけ出してくれるかもしれないということになりました。そこで、各クラスで海の生き物を作ることになりました。

## 何にしよう・・・？

どのクラスもテンちゃんのために一生懸命考えました。子どもたちのつぶやきや様子を一部お知らせします。

## ちょうちんあんこう

「海の底だからライトがいるよね！」ということで、光があるちょうちんあんこうを作ることになりました。光る部分は、風船で作りました。風船を持つと海になっている廊下をちょうちんあんこうになりきってテンちゃんの洋服を探しに行く姿が見られました。

## カニ

「カニさんなら服をはさめるからカニにしよう！」とカニ作りが始まり完成すると「お洋服拾えるかなあ」と話す姿が見られました。

## かめ

かめのイメージが膨らみカメの真似をして泳いだり歩き始め遊びが広がっていきました。甲羅の色はピンク・青色などカラフルな色で作りました。

## サメ

強いサメと、優しいジンベエザメを作ることになりました。そして、「サメだけでは落とした服などを傷つけてしまうかも」ということで、魚も作るようになりました。出来上がったサメを海に飾る時は「強いサメは窓から飾って、魚やかばんがねらえるようにしたいね。飛び出るように飾りたい。」「優しいジンベエザメは、かばんが拾えるように海の中へ飾りたい」とみんなで相談しながら行うことができました。

## いるか

イルカを作ることになりどんなイルカがいいかなと考えっていると、子どもたちからは「普通のイルカと大きいイルカと小さいイルカ」「白イルカ！」と色々なイルカをイメージすることができました。ある日、真っ白なイルカが部屋に飾ってあることに気づくと両手にたっぷり絵の具をつけ夢中になりイルカを作る姿が見られました。最後に作った白イルカは「シロイルカかわいくなあれ！」と嬉しそうに塗る姿が見られました。

## クジラ

「テンちゃんのために早く取り掛かりよう！」と朝から大興奮。大きなクジラに色をつけていくことになりました。両手足が真っ黒になって「おばけみたい～！」「真っ黒だよ！」と笑顔で作ることができました。お父さんクジラ・赤ちゃんクジラを作っていました。

## タコ

タコの足は 8 本と気づいた子どもたち。はさみを使って足を作っていました。今日特別なタコということで海に泳ぎに行くと、墨を「プシュッ」と吐いたり他のクラスの生き物を見に行ったりと楽しみながら遊ぶ姿が見られました。

## テンちゃんだ！

海の生き物を作った子どもたち。テンちゃんの服や帽子、ネックレスなどがどうなったのか毎日気になっている様子。そして、テンちゃんの持ち物が全部もどると、みんな大喜びでした。子どもたちは自分で作った海の生き物にも報告し話しかける姿が見られました。子どもたちの想像力、発想力、協調性、気持ち・・・海をテーマにした活動から様々な事を感じることができました。さあ、どの学年も 2 学期から新しい活動が広がっていきます。子どもたちのつぶやき、姿、友だちとの関わりを大切にしながら過ごしていきたいと思います。また、園での活動の様子をお知らせいたします。

かのグループごとに本のテーマにそって魚をつくっている（写真13）。

さて、こうして作成した魚を各保育室に飾っていく。立体的にサメを作成したグループは、保育室内から廊下に向けて作品を展示した（写真14）。また、くじらを作成したグループは、3メートルにも及ぶ大きなものを共同で造り、その過程でくじらの口や歯の様子、しっぽの形や大きさ、塩を吹く姿などを、さまざまに意見を出し合い、図鑑で調べたり、くじらの動画を見たりして、創りあげていった（写真15）。



写真13. 製作中



写真14. サメ

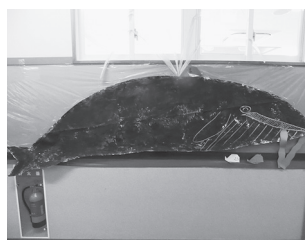


写真15. くじら

## 6. 考察

子どもが主体的にかかわる保育をどのように実践の中に取り入れていくかが、本研究の課題である。子どもにとっては自由感に溢れる保育であり、教師にとっては学びの意図を伝える保育であることを求めた。子どもはどのような保育環境の中でやる気を示すのだろうか。「幼児のやる気を引き出すためには、幼児の姿を捉え、園の環境構成の中に、保育者の教育的意図が込められたしかけがあること」（上田，2016）の必要性が言われている。では、どのような環境が必要なのだろうか。保育内容「言葉」（ミネルヴァ書房）の中で、「子どもは多様な体験をし、その体験を通して発達していく」「体験について、友だちと一緒に、言葉で考え、その考えを言葉で伝え合い、理解したり納得したりしていく過程」（戸田，2010）の中に学びの基盤が存在し、それに対して子どもは主体的にかかわろうとしていくと考えられている。

こうした観点を踏まえて、五歳児が年間を通して、様々な事象にかかわり、仲間と考え、気づき、創り上げていく活動にはどのような方法があるかを検討していった。「幼児期から児童期への教育」（国立教育政策研究所，2005）では「一緒に遊ぶ相手がいることが、幼児の探究心を高め、創意工夫の努力を継続させ、新しい発想を生み出す。」と述べられており、協同的な遊びと学びの重要性を指摘している。そこで、子どもたちがイメージできる内容をピックアップして、継続的に示していく方法を検討した。そうしたことから、年間を通して、いくつかのテーマに触れることができるように、「百科事典をつくる」というコンセプトが生まれた。

ここで、課題となるのが、保育者がどのようにかわればよいかという点である。本園ではレッジョ・エミリア・アプローチにおけるプロジェクト活動について保育者同士学ぶことから始めた。「自律性・協同性を保つために、①一人一人の子どもがそ

の活動の意味や活動を進めるうえでの自分の役割を理解していること、②子ども自身が探索できること、③目的に向かって子ども同士がやりとりを交わす時間が確保されていること」(富貴田, 2014)の三点に留意し、さらに、「子どもが豊かに遊ぶことができるような、質の高い環境づくりと、それを支える大人のかかわり方」(Wales and Hughes, 2009)について学び、保育を展開した。

概ね1ヶ月に一つのテーマで、保育を展開していくと、以下の点に気付かされる。①子どもの体験を通してお互いにイメージを共有しやすい具体的なものでは活発な意見が出される傾向にある。②抽象的なテーマは子どもによってイメージするものが異なりテーマの発展が難しい。③あまり具体的なテーマも発展性に乏しい。①の取り組みを推進するには、実際に見てくるという直接体験や、絵本を通してのイメージの共有化、自分たちで気づき考え調べるといった経験が、有効であることも窺うことができた。

## 7. まとめ

子どもが主体的にかかわる保育の実践が求められている現状の中で、保育の現場は困惑している部分がある。今までの保育では、保育者が子どもに知識や技能を伝える方法が多くとられてきた。そのため、子どもたちは、自分から何かにかかわっていく経験に乏しく、「自分たちで考えて、好きに取り組んでごらん」と言われても、どのようにしてよいかわかっていることも多い。今回の実践記録は、過渡的な段階としての取り組みの様子を示した。保育者側がテーマを意図し、それに取り組む子どもたちは自由な発想で、自由に考えを出し合い、時間の制限も極力減らして、活動できるように試行した。保育者は子どもの発想が生かされるように、自分の意見で保育の展開を主導しないように心掛けてきた。子どもたちの活動が停滞したり、イメージが膨らまない時の対応がしばしば課題となった。その時に考えたことは、「直接体験」と「絵本・図鑑の活用」であった。

今回、4月からの四つのテーマを取り上げたが、この活動はまだ続く。後半になるほど、抽象的なテーマが増えてくるが、9月以降の取り組みを見ると、子どもたちもテーマの取り上げ方に馴染んできたためか、活発な意見の交換がなされイメージの広がりもスムーズになされるようになっている。保育は経験である。子どもたちの考える力、自由な発想力を育てることは、日々のやり取りの中で育てられる。

子どもたちが主体的にかかわる活動の中で見えてきたものは、生き生きと楽しそうにこの活動に没頭する姿であった。やらされる感の強いものではこうした姿は見られない。「明日はこの続きをやろう」「ここのところは、こんなふうに創ってみよう」「みんなで力をあわせて」というような言葉が飛び交う保育。ここでは、まさに子どもたちが主体者となった保育が展開されていた。

#### ■参考文献

- 上田敏丈（2016）子どものやる気を引き出すための保育，平成27年度愛知県私立幼稚園連研究紀要  
究紀要：4-27.
- 岸井勇雄（2004）幼児教育課程総論，pp. 24-31，同文書院.
- 国立教育政策研究所（2005）幼児期から児童期への教育，pp. 2-6，ひかりのくに.
- 齋藤善郎編（1999）子どもが生き生きする保育，pp. 3-12，建帛社.
- 柴崎正行・戸田雅美・秋田喜代美（2010）保育内容言葉，pp. 70-77，ミネルヴァ書房.
- 富貴田智子（2014）プロジェクト活動を通した子どもの自律性・協同性が育つ過程の検討，愛知江  
南短期大学紀要，43：1-13.
- 文部科学省（2008）幼稚園教育要領解説，pp. 23-43，フレーベル館.
- Play Wales and Bob Hughes（2009）プレイワークー子どもの遊びに関わる大人の自己評価一，pp. 11-  
16，学文社.